

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（16）

——異文化教育における「ジェノサイド」——

青 木 順 子

‘Genocide’ in Intercultural Communication Education

Junko Aoki

一個人の幸福感という主観的な感情の充足と、そこに存在する大多数の個人の多種多様な幸福が実現するような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、幸福なる社会の実現、そして、その範囲をさらに広げ、「異なる人々」の属する社会における幸福の実現、という観点を、お互いにどのように関係づけて扱うのかという問いは、異文化コミュニケーション教育が、「教育」として、教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて、必然的に出てくる問いである。筆者は、これまで、この問いに答える過程で発表してきた一連の論考において、個人の幸福の実現¹⁾、幸福なる社会と個人の幸福の選択との関わり²⁾、異なる人々の幸福なる社会との関わり³⁾、「我々の幸福なる社会」を守ると主張する「我々の愛国心」の存在⁴⁾、「我々の正義」の存在⁵⁾、戦争の後の幸福なる社会⁶⁾と考察を続けてきた。前稿では、貢数の関係上、戦争の後で「赦し」が意味するものと、それが与える幸福への可能性を考えていく過程を経て、ジェノサイドのような出来事の後での赦しについては、あらためて考察する必要があると指摘するにとどめた。

- 1) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（10）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（1）—」安田女子大学紀要 No. 36, pp. 57-69, 2008.
- 2) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（11）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（2）—」安田女子大学紀要 No. 37, pp. 35-51, 2009.
- 3) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（12）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（3）—」安田女子大学紀要 No. 38, pp. 75-89, 2010.
- 4) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（13）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（4）—」安田女子大学紀要 No. 39, pp. 109-124, 2011.
- 5) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（14）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（5）—」安田女子大学紀要 No. 39, pp. 127-141, 2012.
- 6) 青木順子 「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（15）—異文化コミュニケーション教育における『幸福』（6）—」安田女子大学紀要 No. 40, pp. 127-141, 2013.

「我々の正義」を振りかざす側の一方的な武力行使によって、非力な状態におかれたまま抹殺された彼等に対する人道上の罪を問われるジェノサイドの場合も、不正の罪が裁かれることだろうが、同様に「赦し」が存在するのだろうか。そもそもジェノサイドのその性質のため、犠牲者達は消滅させられているのであり、その記憶自体の抹殺が図られているのに、誰が誰を赦すとするのだろうか。さらには、多くのジェノサイドは、その進行中に、程度の差こそあれ、「外の世界」が知っていたことに対する責任はどこに帰すべきなのだろうか。これらの問いへの答えを明確にすることなく、異文化コミュニケーション教育における幸福なる社会の扱いについて考察を進めることはできない。

そのために、本稿からは、幸福をテーマにして進めてきた一連の論考を一旦止めて、異文化コミュニケーション教育における「ジェノサイド」の扱いをテーマにして考察を始めていきたい。その過程では、幸福なる社会についての考察に必然的に繋がっていくものと考えている。

1. ジェノサイドの特異性—「言葉」と「法」の要求

ジェノサイドという言葉自体は、長い歴史においては新語の類に入る。S. パワーの *A Problem from Hell*⁷⁾ を基に、このジェノサイドという言葉の発生とそれを実現した人物に焦点をあてることで、ジェノサイドとは本質的には何を指すのかについて考察してみたい。

ジェノサイドは、ラファエロ・レムキンによって人為的に作られた造語である。ユダヤ人のレムキンはナチスの迫害を危惧してポーランドを第二次世界大戦前に立ち去っており、彼ほど事態を重く見ずポーランドを出国しなかった家族は、両親をはじめほとんどの者が生き延びることができなかったという経歴を持っている。大戦中には、ナチスによる人道的犯罪行為を阻止しようとひたすら活動を続け、戦後も引き続き再発を防ぐための法律を設定させるために生涯をかけた人物である。

しかし、レムキンは、ジェノサイドを大戦中のユダヤ人殺戮のホロコーストを示唆するものとして造ったのではなく、ホロコーストのような出来事を指すことが出来る語として造りあげた⁸⁾。言語学者でもあったレムキンが、この語の完成にまで至る思考は非常に緻密である。“mass murder”（「集団殺人」）では、犯罪の唯一の動機が入れ込めず不完全であり、“denationalization”（「非国民化」）は国家やその文化特性を破壊することを指す語で、市民権を奪うことを意味してきた点で問題があり、“germanization”（「ドイツ化」）、“magyarization”（「マジャール化」）等では、普遍性を欠き、生物学上の破壊行為を伝えないという問題があった⁹⁾。レムキンは、こうした問題をなくすために、新しいカメラに「コダック」の命名をしたイーストマンの思考に倣ったといわれる¹⁰⁾。短く、他のものと間違っず発音されず、芸術品において類似しているものがなく、他に関連づけられるものもない、という四つの点である¹¹⁾。こうして造られた語は、ギリシャ語から派生し、「民族」「部族」を意味する「ジェノ」と、ラテン語「カエデレ」から派生し「殺害」を

7) Power, Samantha *A Problem from Hell*, Harper Collins, 2002. 著者、サマンサ・パワーは、2013年、オバマ大統領によって米国国連大使に任命されている。

8) Power, p. 43.

9) Power, p. 41.

10) Power, p. 41.

11) Power, pp. 41-42.

意味する「サイド」を結合させた「ジェノサイド」である¹²⁾。工夫した造語が明示してくれると期待した、その「ジェノサイド」の特異な性質について、レムキン自身は以下のように説明している。

Genocide has two phases: one, destruction of the national pattern of the oppressed group; the other, the imposition of the national pattern of the oppressor. This imposition, in turn, may be made upon the oppressed population which is allowed to remain, or upon the territory alone, after removal of the population and colonization of the area by the oppressor's own nationals.¹³⁾（ジェノサイドは、二つの側面を持つ。一つは、被抑圧集団の民族様式の破壊である。もう一つは、抑圧者側の民族様式の押し付けである。この不当な要求は、抑圧者側の人々によって、被抑圧集団が排斥され、植民地化された後で、居残ることを許されている被抑圧集団、または、その属領に押し付けられる。）

レムキンの、時には孤軍奮闘ともいえるような努力によって、1948年12月9日、国際連合総会で定義されるにいたった“Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide”（「ジェノサイド条約」）の一部は、以下のとおりである。発効は、1951年1月12日である。

Article 2

In the present Convention, genocide means any of the following acts committed with intent to destroy, in whole or in part, a national, ethnical, racial, or religious group, as such:

- A. Killing members of the group
- B. Causing serious bodily or mental harm to members of the group
- C. Deliberately inflicting on the group the conditions of life calculated to bring about its physical destruction in whole or in part;
- D. Imposing measures intended to prevent births within the group;
- E. Forcibly transferring children of the group to another group/

Article 3

The following acts shall be punishable:

- (a) Genocide
- (b) Conspiracy to commit genocide;
- (c) Direct and public incitement to commit genocide;
- (d) Attempt to commit genocide
- (e) Complicity in genocide

Article 4

Persons committing genocide or any of the other acts enumerated in article III shall be punished, whether they are constitutionally responsible rulers, public officials or private individuals.

第2条

本条約において、「ジェノサイド」とは、国民的、民族的、種族的、または宗教的集団の、全てまたは一部を破壊しようとの意図を持ってされる、以下のいずれの行為も、ジェノサイドに該当する。

- (a) 集団構成員を殺害する
- (b) 集団構成員に、身体的、または精神的に深刻な加害行為を与える
- (c) 身体の部分または全部を損傷するように意図した生活条件を集団に故意に課す

12) Power, p. 42.

13) Power, p. 43.

- (d) 集団内での出生を妨げるための措置を課す
- (e) ある集団の子どもを他集団へ強制移住させる

第3条

以下の行為は罰せられる

- (a) ジェノサイド
- (b) ジェノサイドの謀議
- (c) ジェノサイドの直接、そして公然の教唆
- (d) ジェノサイドの計画
- (e) ジェノサイドの共謀

第4条

ジェノサイドを犯した者、第3条に記されたいずれかの行為をした者は、それが憲法上責任を持つ主権者であれ、役人であれ、一平民であれ、罰せられる¹⁴⁾。

レムキンの偉大な功績は、第二次世界大戦のホロコーストの最中であってさえ、ホロコーストだけの特異性ではなく、ジェノサイドという行為そのものの特異性を国際社会に理解させる必要を認識し、かつそのために努力をしたことにある。21世紀に入った今なお、私たちはホロコーストの特異性を、まず最初に、ヒトラーの個人的資質と犠牲者の数をもって、語りがちである。しかし、その犯罪としての規模がどれだけ大きかろうが、ホロコーストは特徴を同じくする事例を持つジェノサイドという犯罪の一つにすぎない。それゆえ、歴史上、ホロコーストの前にもジェノサイドは存在をしたし、それ以後にも存在し続けている。

レムキンは、この特徴を同じくする犯罪全てを防止するために、ホロコーストだけを指すのではない言葉、そして、同時に、戦時中によくおこる残虐行為とも混同されない、同一の目的を持って遂行される特異な犯罪を指す言葉を生み出す必要を強く意識したのである。第二次世界大戦中のホロコーストのジェノサイドとしての実態を人々に理解させ、少しでも早くこの犯罪行為を止めるということでは、彼は成功しなかった。しかし、少なくとも、彼の目的の一部は、戦後のジェノサイド条約の成立によって成功したのであり、以後、この語は定着して使用されている¹⁵⁾。

また、ジェノサイドという犯罪を定義し、それを罰する法律を設定することによって正義を被害者に取り戻す道を確立することにも、彼は成功した。レムキン自身の言葉が記されている。こうしてジェノサイドを定義し犯罪と認めることで何かが変わるのだろうかと挑まれて、レムキンは、“only man has law. Law must be built”（「人間だけが法律を持つのです。法律を作るべきな

14) Power, p. 62. 邦訳は、著者によるものである。

15) ジェノサイドの研究者達が、レムキンのジェノサイドの定義全てにおいて同意しているわけではないが、少なくとも、彼の定義が示そうとした集団と大衆、大衆と大規模の抹消という図式は、20世紀の前例のない暴力を適切に示すものとなったし、レムキンは歴史研究において、これを正しく読み取ったといえる。The link between collective and mass, then between mass and large-scale extermination, was the defining dynamic of the twentieth century's unprecedented violence. In his historical studies, Lemkin appears to have read this correctly. (Jones, Adams *Genocide*, Routledge, 2006, p. 12) 文化の破壊行為についてのレムキンの強調については、実際、文化を破壊するということが人間を破壊するのと同じような次元で問えるのだろうかという疑問が呈されている。この点は、たとえば、「アイヒマンは人間の生命の破壊者として裁かれているのか、文化の破壊者として裁かれているのか？人間を殺した者は、その殺人によって文化もまた破壊された場合には、一層罪が重くなるのだろうか？」（アーレント、H. 大久保和郎（訳）『イエエルサレムのアイヒマン』みすず書房、1998、p. 77）の問いにも関連してくるであろう。

のです）」と強く反論したという¹⁶⁾。こうした法律制定の主張の背景には、1921年、レムキンが21歳の時に起きた事件—ドイツで、トルコでのアルメニア人を組織的に破壊することを指揮したメフメト・タラート・パシヤを、アルメニア人のソゴモン・テフリリヤンが暗殺した—がある¹⁷⁾。テフリリヤンは、家族、親族全てを殺害され、自らも死体として放棄され九死に一生を得た人物である。第一次世界大戦敗戦後ドイツに逃れ、当時は一市民として暮らしていたタラートを、法の裁きでは罰せないゆえ、報復行為がテフリリヤンに代替的に生じたと考えられる。レムキンは、国家主権が少数民族を破壊しようと試みる時、それを国際社会が犯罪として追求出来る法律さえ存在せず、罰することが出来ないという事実で愕然としたという¹⁸⁾。今や、レムキンの多大な努力で、「国際法」として通用する法律は成立したのである。ジェノサイドとは人間が犯す非人間的な犯罪行為であるが、その一方で、人間はそれを裁く法律を持つ能力も持ち得るということは、レムキンにとって、彼の活動を支える希望でもあったのだ。

こうして言葉と法が確立した、その「ジェノサイドの後」に何が来るべきかと問うてみる時に、「正義」が最初に出てくること自体は誰もが認めるところであろう。全ての犯罪がそうである。だからこそ、レムキンがジェノサイド法の成立に奔走したのであり、「ジェノサイド後」は、法に基づき、正義を被害者に返す番である。しかし、前節で示されたようなジェノサイドという犯罪の特異性が、「ジェノサイド後」の正義を取り戻す過程にも困難をもたらす。大きく分けて5つの困難が考えられる。第一の困難は、特定の文化集団に向けられる組織的、暴力的、犯罪に必然的に伴う「出来事の記憶」に関わってくる困難である。第二の困難は、多くが国家や民族の規模である組織的な犯罪であるがゆえに、加害者を法廷に連れ出すことに多くの「政治的配慮」が入ってくることにある。第三の困難は、たとえ一番目と二番目の困難が克服されても、組織的な犯罪であるがゆえに、加害者が膨大な範囲に広がり、「大勢が該当する」ことである。第四の困難は、最初の三つの困難が克服されるように見える時でさえ、ジェノサイドのような暴力行為に対して被害者に正義を取り戻す行為は、「完全な正義の回復と思えるような形」—それが存在していると仮定したとして—では実現可能とならないことである。それが、第五の困難—ジェノサイドのような犯罪は、まさにその特異性のために、正義を取り戻すために、法の外の「別方法」が被害者には必要となる—に繋がっていく。

この五つの困難は、相互に密接に関わりあっている困難でもある。このジェノサイドの特異性ゆえに引き起こされる困難を一つずつ概観していくこととして、まず次節からは、第一の困難として挙げた「出来事の記憶」を取り上げる。

2. 「出来事の記憶」—アイデンティティの破壊と記憶

戦争とは異なる性質を持つジェノサイドを、レムキンは、また戦争より危険だとも認識していた¹⁹⁾。なぜなら、戦争においても、人々は多大な身体的、精神的な損傷を負い、それらは永続するが、ジェノサイドでは、標的となった集団は、身体的にも文化的にも破壊され、その損失は永続のものとなり、たとえジェノサイドの生存者がいたとしても、その者達は非常に貴重な自分の

16) Power, p. 55.

17) Power, p. 19.

18) Power, p. 19.

19) Power, p. 51.

アイデンティの一部を永遠に失っているからである²⁰⁾。このアイデンティの破壊行為が、戦時中の他の軍事行為とは異なる、ジェノサイドの特異性なるものの一つである。人間としての生存を完全に否定されるような行為の連続により、生存者にも、永続的といえるトラウマが残ることになる。それが、ホロコーストの生存者である人々が経験を記した手記において、彼等が雄弁に丁寧に来事語り得ているように見えようとも、同じ語り手がそこで失ったもののためにそのまま語ることが出来なくなったものが言語化されないで存在していることを私達が知ることになる理由である。例えば、収容所での実体験を記した作品で、世界的にベストセラーとなり、日本でも広く知られているものに、エリ・ヴィーゼルの『夜』、ヴィクトール・フランケルの『夜と霧』、ブリーモ・レーヴィの『アウシュビッツは終わらない』があるが、それらを読んでみれば明らかである。

エリ・ヴィーゼルの『夜』²¹⁾。その中のよく知られている神についてのくだりはまさにその例そのものであろう。3人のユダヤ人が収容所で絞首刑となり、公開処刑される。一人はまだ少年である。処刑を見学させられているヴィーゼルの後ろでつぶやく声が聞こえる。「〈神さま〉はどこだ、どこにおられるのだ²²⁾」。少年は長い間苦しむことになる。男が再度言うのを聞く。「いたい〈神〉はどこにおられるのだ²³⁾。」ヴィーゼルは、自分の心の中で、その答えを聞くのである。「ここにおられる——ここに、この絞首台に吊るされておられる……²⁴⁾」。長い間、宗教は偶有性を説明してくれるがゆえに人間の心の拠り所であり続けた。なぜ生きているのか、なぜ死ぬのか、なぜここにいるのか、なぜこれが今自分に与えられるのか—自分が偶然性に翻弄されるように思われる時、それらを自らに説明してくれるものを必要とし、宗教はその役割を果たしてきたのである。近代化がすすみ、さらにポストモダン社会へとすすむにつれて、宗教の影響力はかつてのように大きくはない。しかし、それは、偶有性を説明してくれる物語が多様な形で社会に存在しているからであって、宗教が長く担ってきた役割そのものがなくなっただけではない。ましてジェノサイドという極限状態に人間が置かれた時、自らが置かれている不当な状況を説明し得る何かを、救いを求める祈りとともに求めない者はいないはずだ。その神は、既存の宗教の神であるかもしれないし、そうではない、ただ偶有性を自らに説明してくれる何らかの物語としての神であるかもしれない。いずれにしても、それらの神は誰ひとりとして、ジェノサイド自体の進行を止めることはできない。進行中のジェノサイドに存在し、絞首刑になって長く苦しむ少年に見たことも、その時の声も、ヴィーゼルは記憶し得たけれども、それは生き延びた彼が想起する記憶であって、その彼自身、その出来事以前の彼ではもうないのである。アイデンティの一部を変容させられずに生存を許されないようなジェノサイドとは、暴力的な出来事なのである。最後に、解放されて、ジェノサイドの渦中で一度も見ることがなかった自分の顔をヴィーゼルは鏡で見る。「鏡の奥から、死体が私をずっと見つめていた²⁵⁾」。それは月日とともに変容し得るのだろうか。ヴィーゼルは、その答えを間髪入れず続けて記している。同じままで立ち去ることを決して許さない暴力的出来事から生還し、そしてそのままそれを生きるしかない自分—「私

20) Power, p. 51.

21) ヴィーゼル, エリ 村上光彦 (訳) 『夜』 みすず書房, 2010.

22) ヴィーゼル, p. 127.

23) ヴィーゼル, p. 128.

24) ヴィーゼル, p. 128.

25) ヴィーゼル, p. 206.

の目のなかにあった死体のまなざしは、それっきり私を離れたことがない²⁶⁾。』。

フランケルの『夜と霧』²⁷⁾。優れた精神科医であった彼の人間洞察力を持って、アウシュビッツにおいてさえ人間性の片鱗を見せる数々の瞬間を彼は確かに思い出すことは出来る。また、収容所がすべてを人間から奪っても、「与えられた事態にある態度をとる人間の最後の自由²⁸⁾」は存在し得たこともである。しかし、同時に、そこにいた人々が名前を持つ人間としてではなく「番号」として貶められ、「自分自身の屍体の後から進んでゆく²⁹⁾」、「生きる屍³⁰⁾」のような存在におかれていることもまた覚えているのだ。暴力行為の中でいくばくか良心も失い、ともあれ生き残った自分を含めて疑いもなく言えることは、「最もよき人々は帰ってこなかった³¹⁾」。帰りが得た人々の破壊されたアイデンティティも同じである。もっともよき自分は暴力的に壊されるしかなかったのだ。

プリーモ・レーヴィの『アウシュビッツは終わらない』³²⁾ は、この人間性の崩壊、アイデンティティの変容が出来事そのものの目的であるという自覚を、上述した2冊より明確に作者が記している。人間がそのアイデンティティを破壊されていく事実が何度も何度も繰り返し描かれる。民間人の目から見た自分達が、「おぞましいほどの奴隷状態³³⁾」にいて、「髪も、名誉も、名前もなく、毎日殴られ、日ごとにきたならしくなり、目には、反逆心も、平安も、信仰の光も読み取れない³⁴⁾」。人間であることを忘れなかったのは、たった一人、ロレンツォのお陰だと語る。彼だけが、「外にはまだ正しい世界があり、純粹で、完全で、墮落せず、野獣化せず、憎しみと恐怖に無縁な人や物があること³⁵⁾」を思い出させてくれたからだ、と。しかし、そう書きながらも、ジェノサイドを行使する者も、そして、自分を含めて行使されている者も、もはや「人間ではない³⁶⁾」のだと認める。結局、誰も例外ではない。この「狂気の位階に属するものはすべて、逆説的だが、同じ内面破壊を受けているという点で一致していた³⁷⁾。」それゆえ、彼の記憶において、狂気の位階の上にはいたドイツ将校も、その最下位に置かれていた自分達も同じように、人間的ではない。収容所の化学班に入る試験時、バンヴィッツ博士が顔をあげて彼を見る。位階の上位にいる彼の視線―「あの視線は人間同士の間で交わされたものではなかった。別世界に住む生き物が、水族館のガラス越しにかわしたような視線だったのだ³⁸⁾。」選別が終わって、自分のガス室送りが決まった者とそうでない者が同じ部屋にいる。選別されなかった老人クーンが、高い声で選別を逃れたことを感謝する祈りをはじめ。隣のベッドには、翌々日はガス室行きの20歳のベッポがいる。

26) ヴィーゼル, p. 206.

27) フランケル, ヴィクトール・E. 霜山徳爾 (訳) 『夜と霧』, みすず書房, 2013.

28) フランケル, p. 166.

29) フランケル, p. 174.

30) フランケル, p. 174.

31) フランケル, p. 78.

32) レーヴィ, プリーモ 竹山博英 (訳) 『アウシュビッツは終わらない』 朝日選書, 2003.

33) レーヴィ, p. 148.

34) レーヴィ, p. 148.

35) レーヴィ, p. 149.

36) レーヴィ, p. 149.

37) レーヴィ, p. 149.

38) レーヴィ, p. 127.

いかなる贖罪の祈りも、免罪も、罪の償いも、つまり人間に可能なすべてをもってしても、いやすことのできない、いまわしい出来事が今日起きたのを、クーンは分からないのか？もし私が神だったら、クーンの祈りを地面に吐き捨ててやる³⁹⁾。

しかし、そう思う彼—ジェノサイドの特異性である組織的に意図をもってなされる人間性の破壊行為という目的を少なくとも認識出来る、ホロコーストは「勝ち誇るドイツ人の手で始められた野獣化の作業⁴⁰⁾」と自身が気付くことが出来る—もまた同時に、その犯罪の意図する通り、不当にも破壊されるものの存在を自らの中に認めるしかない。

人を殺すのは、人間だし、不正を行い、それに屈するのも人間だ。だが抑制がなくなって、死体と寝床をともししているのはもはや人間ではない。隣人から四分の一のパンを奪うためにその死を待つものは、それが自分の罪ではないにしろ、最も野蛮なビッグミーや最も残忍なサディストよりも、考える存在としての人間の規範からはずれている⁴¹⁾。

わたしたちの存在の一部はまわりにいる人たちの心の中にある。だから自分が他人から物とみなされる経験をしたものは、自分の人間性が破壊されるのだ⁴²⁾。

『ホロコーストの音楽』⁴³⁾で、ホロコーストの最中のゲットーと収容所における音楽の機能に関しての研究を発表したギルバートは、ジェノサイドにおいて、そこに音楽があったために、その中でも精神を高揚し人間性を保持できたのだとか、生きる力を得たのだといったレトリックが存在してきた事実を踏まえて、彼の研究をまず始める⁴⁴⁾。しかし、彼が膨大な資料を基に丹念に検証していくうちに、事実は全くそうではなかったことが見えてくる。ジェノサイドという人間性の破壊を意図するような犯罪の最中では、音楽は、「状況に対処するための枠組みの一部⁴⁵⁾」にしか過ぎず、「人々が消耗し、罹患し、凍え、餓死するという凄惨な世界では、ある時点から音楽が花開くことはもはやなかった⁴⁶⁾。」のである。結局、ジェノサイドの状況下で、自分自身の「尊厳を奪われないかどうかを最初に決める権利が人びとにあったと考える⁴⁷⁾」前提自体が誤っているのだと彼は言い切る。

3. 「出来事の記憶」—記憶の抹消

死者は語れない。ジェノサイドは、その犯罪の性質において、多くの人々の生存を許さないことになる。最も苦しい残酷な行為をされた者達は、実は帰って来られなかった者達でもある。人間性を奪われ、精神的にも破壊され、そして、最終的には、身体的に完全な破壊をもって、生きること自体をその場で奪われた者達は、ジェノサイド後に語ることは永遠にできない。ジェノサ

39) レーヴィ、p. 159.

40) レーヴィ、p. 215.

41) レーヴィ、p. 215.

42) レーヴィ、p. 215.

43) ギルバート、シルリ 二階宗人(訳)『ホロコーストの音楽—ゲットーと収容所の生』みすず書房、2012.

44) ギルバート、p. 24.

45) ギルバート、p. 28.

46) ギルバート、p. 28.

47) ギルバート、p. 278.

イドは、犠牲者の記憶を消すという点に、まさにその特異性を持っている。

一般的には、歴史的出来事さえ、物語と無縁にはなれないとは言える。歴史もこうした出来事の物語化によって初めて理解できたと私達は感じるからである。言い換えれば、出来事が語られる時、物語として提示されるゆえに私達は理解できるのである。たとえば年表の年号の下に、一文で書かれるような出来事でさえ、年表に歴史上大事な出来事として選ばれている時点で、物語としてそれぞれの記述と結び付けられる文脈に存在している。

野原は、こうした複数の出来事を結び付ける文脈を、「人間的コンテクスト」と呼び⁴⁸⁾、歴史的出来事は、「『人間的コンテクスト』の中で生成し、増殖し、変容し、さらには忘却されもする⁴⁹⁾」のであり、そこから孤立した「事実そのもの」は存在できないという⁵⁰⁾。その「事実そのもの」を固定するために、人はこのコンテクストを必要とし物語文を語る必要がある⁵¹⁾。過去の出来事は、物語文によってまた別の出来事に結び付くしかなく、その意味においては、過去も未来と同じように完結してはならず、語られる物語によって想起されることになり、言い換えれば、過去に生じた出来事は、「物語行為によって語りだされた事項にしか存在しない」ことになる⁵²⁾。さらには、ある物語文が真実であるか虚構であるかは、それが「証拠」に基づいた「主張可能性」を有し、歴史叙述のネットワーク中に矛盾なく組み入れられるか否かにかかっているとまで言えるのである⁵³⁾。そして、ジェノサイドは犠牲者が同じ状態では戻って来られないことを意図する犯罪であるがゆえに、まさにこの「証拠」は希少となる。

一シーンも過去のジェノサイドそのものの映像を見せないで、「ただ過去について語る」ことで、その過去に「より現実的に戻っていく」試みであったランズマンの『ショア』で、ミュラーというユダヤ特務班で生き延びた男性が語る。それまで雄弁とも思われた彼が涙で話を途切らせる箇所がある。

その時、私は悟ったんです。私の生命には、もう何の価値もない、と。生きて、いったい何になるのか？ 何のためなんだ？ それで、私は、あの人たちといっしょに、ガス室に入ったんです。死ぬことに決めたんです、あの人たちと一緒に⁵⁴⁾。

ガス室に向かう同郷のユダヤ人女性が、死を決心してガス室に入った彼に言う。

じゃあ、あんたも、死のうというのね？ でも、無意味よ。あんたが死んだからといって、私たちの生命が生き返るわけじゃない。意味のある行為じゃないわ。ここから、出なけりゃだめよ、私たちのなめた苦しみを、私たちの受けた不正を……、このことを、証言してくれなければだめです⁵⁵⁾。

彼女達の受けた不正も苦しみも何一つ変えられないが、証言によって、それらが忘れられないこ

48) 野家啓一『物語の哲学』岩波書店、2011年。

49) 野家、p. 11.

50) 野家、p. 12.

51) 野家、p. 12.

52) 野家、p. 17.

53) 野家、p. 181. (そうであったとしても、歴史には、出来事への「真実性」および「歴史的認識」への要求は存在することは確かであり、またそうでなければならぬだろう。次稿で、この点について触れたい。)

54) ランズマン、C. 高橋武智（訳）『SHOAH』作品社、1995、p. 362.

55) ランズマン、p. 363.

とを彼女は望んだのであり、代わりに死者の記憶を語ることが必要だと伝えたのである。たった一人、そこで生き残った人間が存在したから残せた、まさにわずかな偶然によって可能となった死者の言葉である。しかし、ジェノサイドで身体的に破壊をまぬがれても、精神の一部は破壊され、自分のアイデンティティは暴力的行為によって変容させられた者には、たとえ生存していたとしても語れないことは沢山残る。語ることを不可能にするトラウマを抱えているからである。そして、そのトラウマを抱えて生きているだろう彼が、さらに死者となった彼女の最後の言葉を語らなければならない。ここにもまた残酷さと困難がある。歴史を証言するという行為は、その歴史が既に生きられてしまったものであるゆえ、語ることに於いて語る者の苦痛を絶えず引き起こすディコンストラクションの中にある。生存者の少なさゆえに死者の沈黙が真実を語るようなジェノサイドのような最悪の歴史の出来事など、死者のために語ることでさえ耐え切れない苦痛が伴うであろう。例えば、人類史上、最大規模の悲惨さを呈し証言者をも残さないという「最終解決」による記憶の消滅を図ったナチスの強制収容所で起こったことを物語にすることは、むしろ物語不可能性に行き当たるのが普通である。歴史的事実は人々の理解のために物語化を必要とし、同時に、ジェノサイドの記憶を語ることが記憶の物語不可能性に行きあたるというジレンマが困難を呈するのである。

一方で、物語性を許さない時こそ、どのように記憶を刻印し、膨らませ、証言するかが問われてもくる。歴史が示す差異性を証言者がどう捉えているかということ語ることで示していくしかないのである。前節に挙げた『ホロコーストの音楽』でも、ジェノサイドのような出来事では、人間の救済や慰め、精神的な抵抗といった物語化に変わること出来事の整理をさせるという傾向があること、特に、精神的な抵抗のレトリックは、犠牲者が無抵抗ではなかったと犠牲者の行動に何らかの意味付けを持たせる、苦しみにさえ意味を与えるという善意からの肯定的な意図が働いていることは考えられると著者ギルバートは言う⁵⁶⁾。

しかし、他方で、感傷や神話化に陥る傾向も併せて持ち、音楽が生きる力を与えた、音楽で人間性を保持できた、といった言説は存在しても、それと呼応する事実、彼が研究した限りでは存在していなかったのである⁵⁷⁾。こうしてジェノサイド下での英雄的行動や精神的抵抗への言説へ自分が疑念を示すことが、犠牲者達への敬意を払わないとか、彼等の死を無意味とすることと同一視されることは強く拒否し、ジェノサイド進行中の生には、多様な感情や行動、矛盾した一貫性のない言動も含めて存在したことを認める方が、感傷的に神話化した物語化より、犠牲者の記憶に誠実なのであると言う⁵⁸⁾。

死者を証言しようとする、その過程を示すことで、ジェノサイドという犯罪の特異性を示し得たものの一つに、『暗闇の中で マーリオン・ザームエルの短い生涯1931-1943』⁵⁹⁾がある。作者、ゲッツ・アリーは、自分がマーリオン・ザームエル賞を受賞したという知らせを受けた後、マーリオン・ザームエルの生涯について調査を開始する。ホロコーストという犯罪を記憶に留めようとする活動に与えられる賞で、賞の名前は、収容所に移送され殺害されたユダヤ人の子どもの名前から偶然選択されたものである。その過程において、アリーは、マーリオンの写真や彼女の

56) ギルバート, p. 24.

57) ギルバート, p. 28.

58) ギルバート, p. 278.

59) アリー, ゲッツ 鷺巣由美子(訳)『暗闇の中で マーリオン・ザームエルの短い生涯1931-1943』三修社, 2007.

エピソードを手に入れる。しかし、それらは僅かである。それよりはるかに多く得ることが出来たのは、ザームエル一家が迫害を受け、次第に普通の人々が許されている生活を送ることが出来なくなっていく過程を示す公文書である。組織的に行われるジェノサイドの特徴を示す、組織のみが発行できる数々の書類が、ザームエル一家とゆかりの人々が二度とそこから生還出来なかった収容所まで行きつくことを可能にした犯罪の姿を明示する。本には、そうした公文書の記録が何頁にも渡って掲載される。ユダヤ人と記載された「国勢調査」、ユダヤ人の強制労働者が働かされた「ダイムラー・クライスラーの工場従業員名簿」、財産没収のための16頁にも及ぶ「財産申告書」、そして、「アウシュビッツへの移送リスト」等。家族と一緒にリボンをつけて笑顔のマリーオンの写真と、1年生の時のクラスメートが覚えていたというある夜のエピソード—怖いとマリーオンが泣いて、「そこではみんな山の中のトンネルを通っていくの。途中には大きな穴があって、みんなそこに落ちていなくなってしまうのよ⁶⁰⁾。」と言ったという話—は、読者にとっては心情的には最も訴える過去からの犠牲者の声である。しかし、犠牲者となった幼少少女の姿や声の痕跡は、結局は僅かしか得られなかったという事実、そして、それをはるかに上回る一家の運命を示唆する公文書が得られたという事実でもって、個人の顔が見えるような過去の記憶をここまで失わせるジェノサイドの本質が何であったかを、結果的には語り得たのである。アリーは、最後にこう自らの覚悟を示している。個々の犠牲者について、その一人ひとりの個性を取り戻すために出来ることは、ただただ調査し、記録し、思い出すことにしかない、と⁶¹⁾。

さらには、ジェノサイドの記憶は、意図的抹消の危険に直面さえする。物語化出来ない記憶—出来事の場合は時の流れに吞まれるまま消失し、証言のみが真実を見せる可能性があり、その証言者だけが証拠であり、聞き手にその客観的判断がまかせられる—を加害者のカテゴリーに入る者が意図的に歪めることはさほど難しいことではないのである。かつて文芸春秋の雑誌『マルコポーロ』が「戦後世界史最大のタブー、ナチ〈ガス室〉はなかった。」という記事をきっかけに廃刊した時、インターネットで流されたのは、以下のようなものだった—「雑誌の内容は、何等、問題とされることのない内容で、600万人の殺害については嘘であり、この点については真実であることは明らかであります⁶²⁾。」記憶のみが安易な物語化に抵抗できる時、それに乗じてその出来事存在さえ拒絶する者がこのように存在する。前項に挙げたマリーオンの生涯を記したアリーは、後書きにおいて、積極的に歴史的事実を隠蔽したい者や相対主義者達、「ホロコースト問題に終止符を打つことを主張する者たち⁶³⁾」が「多少なりとも知的に、無神経に、そして創造的に、事実をねじ曲げ、忘却、抑圧、美化、責任逃避⁶⁴⁾」をしようとしていることに抵抗する必要があることを述べ、目的も方法も異なるこうした全ての行為は、それでも一つの点で同じこと、すなわち、犠牲者を「軽視すること⁶⁵⁾」と言う。ジェノサイドの記憶の証言とは、声を失った死者のために証言を続ける者にとって過酷な戦いさえ要求するのである。

60) アリー, p. 117.

61) アリー, p. 165.

62) 尾関周一『現代コミュニケーションと共生・共同』青木書店, 1995, p. 84.

63) アリー, p. 165.

64) アリー, p. 165.

65) アリー, p. 165.

4. 「出来事の記憶」—虚構の物語化

虚構の物語も、ジェノサイドをテーマとして多く創造されてきた。完全なる虚構の登場人物を創造し、歴史的事実とされているジェノサイドの文脈に入れ込むものから、歴史的事実との区別が難しいような、実在した人物を主観的解釈の文脈のジェノサイドの場に入れ込んだものまでを含めて、である。人間を描こうとする物語のテーマに、ジェノサイドだけが例外とはならないのは当然とも言えるし、虚構の物語で人が出来事を扱うことの意義については多くの人々が信じ語ってきたことでもある⁶⁶⁾。実際の証言による物語化さえ簡単に許さないような出来事が虚構の形式で描かれることで、むしろジェノサイドの記憶を残し、経験しなかった人々にそれを知る機会を与えることができることも事実である。例えば、ジェノサイドの一つ、ナチスによるホロコーストを生きた人々を描いた小説は数多く存在し、長い月日読まれ続けており、世界的規模で上映された映画も少なからず存在する。ジェノサイドという犯罪を生き延びることの過酷さ、その過酷さの中で問われる人間の尊厳、その後を生きることの過酷さ、被害者の生における葛藤から平安までと、まさに様々な物語が存在している。

しかし、今まで考察してきたようなジェノサイドの特異性ゆえに、虚構の物語が実際のジェノサイドという出来事を変容させてしまう恐れも存在することになる。例えば、ジェノサイドに英雄が登場するような物語である。悲惨さの中でジェノサイドに屈しないような努力を示した者達が実際にいなかったからではない。ジェノサイドという出来事が英雄登場の物語にされることで、本当には何がジェノサイドであったかを見失わせるような物語化となる危険があるからである。一例を挙げれば、20年前の1993年、著名なスピルバーグ監督がホロコーストを扱って大きな話題となった映画、『シンドラーのリスト』である。そこでは、実在した人物を扱い、一人の良きドイツ人という英雄化された人物の物語において物語を意図的に作り、それをホロコーストそのものとして提示している。ハリウッドの娯楽映画としての範疇を出ないことが責められるのではなく、その範疇を一度も出ないのに、「出たふり」をして記憶を物語化することで、むしろ記憶を別の意図とすげ替える行為が問題なのである。さらには、意図された現在の世界の構図の正当化まで文脈に読み取ることができるとしたら、これは記憶の抹殺を生み出すのと同じである。

前節にあげた『ショアー』でランズマンが試みたのは、安易な物語化を避けて、記憶の証言で個別の体験を重ねて普遍的なレベルのホロコーストを描くことであったが、岩崎⁶⁷⁾は、このランズマンのコメントを引用して非難している。ランズマン—「スピルバーグはすぐに、自分がジレ

66) 物語の意義が、フロイトが言うところの「死との和解」（「死によって失われたものの代償を生のうちで探し求めるには、文学や演劇などの虚構の世界に頼るしかないのである。虚構の世界には、死ぬことをわきまえている人物や、他人を殺すことのできる人物が登場する。わたしたちが死と和解することのできる条件が満たされるのはこの虚構の世界だけである。ここでのみ、生のさまざまな浮き沈みにもかわらず、不可侵の生というものを維持することができるのである。」（フロイト、ジークムント 中山 元（訳）『人はなぜ戦争をするのか』2008年、pp. 76-77）にあり、アーレントが言うところの「生との和解」（「リアリティはいかにしても確定できるものではない。『存在するものを語る』人が語るのはつねに物語である。そしてこの物語のうちで個々の事実はその偶然性を失い、人間にとって理解可能な何らかの意味を獲得する……物語作家—歴史家ないし小説家—の政治的機能は、あるがままの事物の受容を教えることである。真実さとも呼びうるこのあるがままの事物の受容から、判断の能力が生じてくる。」（H. アーレント 引田隆也他（訳）『過去と未来の間』みすず書房、1995、p. 357.）であれ、物語は人間に必要なのである。

67) 岩崎 稔「防衛機制としての物語」『現代思想』vol. 22-8、1994、pp. 176-189.

ンマに直面していることに気づくだろう。彼は、ホロコーストが何であったかを同時に言うことなしには、シンドラーの物語を物語ることができない。彼は1,300人のユダヤを救ったドイツ人の物語を語りながら、ホロコーストが何であったかをどうして言うことができるだろう？ なにしる、圧倒的多数のユダヤ人たちは救われなかったのだから⁶⁸⁾。」そして、このランズマンのいうジレンマにはスピルバーグは向き合うことなく、「〈アウシュビッツ〉とともに解体されたもの、ホロコーストにおける人間とその行為との単純な統合の可能性を、かれは平然と持ち込んでいる。〈アウシュビッツ〉において破壊されたものを、『シンドラーのリスト』はなおも存在するふりをし続けている。極論すれば、それは〈アウシュビッツ〉の否定でもある⁶⁹⁾。」そして、彼が言うように、最終的に映画でモノクロからカラーに移るエルサレムの場面で、善としてカラーで描かれるのは、イスラエルという国家の賛歌である。そして、それが複雑なパレスチナ問題を論議することを妨げ、単純に善として表出するイスラエル国家の正当化になるなら、むしろ、この映画の「指定するコンテクストに抵抗しなければならない⁷⁰⁾。」と言わしめるほどの危険性を孕むのである。その時、映画の最初に幼いユダヤ人の少女の着ていた赤いコートのみが、彼女の過酷な運命を示すようにモノクロシーンにおいて、カラーで表象されるという話題となった演出でさえ、善としてのカラーの文脈をさらに効果的にするための伏線ではないのだろうかと疑う必要まで出てくるのである⁷¹⁾。

私達が異なるカテゴリーの他者に不寛容であり、異人を排除したり、真のコミュニケーションをしなかったりした、そうした歴史の胸いたむ出来事を虚構の形で再現すること—それはそうした人類の恐るべき仕業を、同じカテゴリーの同じ資質がある者が語り継ぐという必然的に起こる苦痛なしではとてもできない行為なのである。なぜなら、自分の中に同じ仕業をし得る同じ態度—対話を避けている偏見—を見ないわけにはいかないのだから。誠実に作り上げられた物語は、またその痛みを必然的に避けることができない点では例外ではない。それは正しいことでもあるのだ。激しく突き放されたような痛みを感じるはずなのである。ジェノサイドは、そういうものとして存在するしかない。ジェノサイドで声を永遠に失った被害者に対する冒涇は、どんな意図からであれ、ジェノサイドを「現実的」だと思わせる目的で、英雄物語、神話、精神的高揚の話へと、安易に「物語化」してしまう行為そのものに存在するのであり、それは歴史的出来事として、ある意味で避けることが出来ない何がしかの物語化においても、完全な創造物として提示さ

68) ランズマン、クロード 高橋哲哉（訳）「ホロコースト、不可能な表彰」鶴飼 哲、高橋哲哉『〈ショーアー〉の衝撃』未来社、1995、pp. 120-125.

69) 岩崎、p. 182.

70) 岩崎、p. 188. ランズマン自身の『シンドラーのリスト』批判の一部はこうである。「…私は多くの人からシオニストと見られているが、スピルバーグが『シンドラーのリスト』の最後でやったような強引なことは決してできなかっただろう。イスラエルにあるシンドラーの墓というあの大きいな和解。その墓の十字架とユダヤ風の小石。突然現われてハッピーエンドの仮説をほのめかす天然色……。ちがう。イスラエルはホロコーストの贖いではない。あの600万人はイスラエルが存在するために死んだのではない。」（クロード・ランズマン「ホロコースト、不可能な表彰」pp. 124-125.）

71) この赤いコートを着用した少女役を演じた、当時3歳の少女は、20年経った2013年、新聞社のインタビューにこたえて、「自分が赤いコートの少女だった」事実は、少女時代にはトラウマとなる時期もあったが、成長した今は、“little legend”（「小さな伝説」）として誇りに思っていると話している。（“I was the girl in the red coat-and it left me traumatized.” *The Washington Post: A Special Report for the Yomiuri Shinbun*, March 10, 2013）その誇りに思う物語は果たして「現実」を安易に「伝説」に変容することなく伝えたのだろうか。物語の責任は限りなく重く、私達には問う責任がある。

れる虚構の物語においても同じである。結局、ジェノサイドのような出来事が描かれて、それを経験しなかった者達に、明らかに現実的、つまり、リアルに描かれていると信じさせようとしており、同時に、そこに描かれていないもの、実際には描かれ得ないものが、懐疑も痛みも存在しないまま無視されていると感じられる時に、私たちは用心する必要があるのだろう。その時、ジェノサイドの犠牲者の記憶は、二度目の冒涇を受けているのだ。一度目は、記憶をつくるその犯罪そのものにおいて起こり、そして、二度目は、その彼等の記憶を使う者によって再びなされる。

ジジエクは、共同体の一員になるとは、行間において伝承されてきたトラウマ的な空想の歴史を受け入れることにあると説明する⁷²⁾。彼が例に挙げているのは以下のような話である。神の啓示を受けたユダヤの預言者をラビが若者に語り、若者は、それが真実かと問う。ラビは、「おそらく実際には起こらなかっただろう。でもこれは真実である。」と答える。ジジエクは、こう続ける。フロイト的な神話は、これと同じで、ある意味では、「現実（リアリティ）よりも現実的（リアル）である。それらは真実である。ただし、もちろん、それらは『実際には起こらなかった』⁷³⁾」ジェノサイドという出来事さえ、他のすべての出来事と同じように、「現実より現実的に描く」ことは可能なのであろう。でも、ジェノサイドが「実際に起こった」がゆえに、そして、このジェノサイドという出来事の特異性ゆえに、安易に「現実的」なふりをさせて神話を創造することは、そしてそれを「真実である」と主張することは、まさに人間性への非人間的行為となるのである。

5. お わ り に

本稿は、頁数の関係で、これ以上は考察を進めることはできない。第一の困難についてさえ、まだいくつもの整理しておく必要がある論点一特に、(注15)と(注66)で触れた文化の破壊と歴史と文学の相違一を次稿に残すことになったが、今の時点で、異文化コミュニケーション教育において「ジェノサイド」を異文化コミュニケーション教育ではどのように扱うべきなのだろうかという問いに対して言えるのは、ジェノサイドの事実をとにかく「正しく教える」こととなろう。ジェノサイドの事実を理解させようとレムキンが多くの人々に話しても、「信じられない」という応答が返って来ることが、彼の活動を度々妨げたとパワーが本で記している。そんなことが実際に起こるとはとても信じられないため国外へ逃れなかったレムキンの両親や親族は、みなジェノサイドの犠牲者となった。人間が人間を破壊する行為を組織的に計画的に遂行していく事実を信じたくはない。これは普通の人間の反応であろう。しかし、歴史は、人間はジェノサイドを起こし得ることをすでに証明している。個々の人間が、ジェノサイドという犯罪についてまずきちんと知ること、そして、その犯罪行為の人間の尊厳への冒涇について理解すること、そして、その上で、正しい知識を持った人々がその後どれだけ共感を持った生き方をしていけるのかを妥協せずに問うこと、これらがまず異文化コミュニケーション教育が取り組むことができることであろう。その第一の正しい知識を持たせることには、ジェノサイドの歴史的事実だけではなく、当然、ジェノサイドという犯罪の特異性とそれから派生するジェノサイド後の困難がすべて含まれるべきである。

72) ジジエク、スラヴォイ 中山 徹(訳)『脆弱なる絶対』青土社、2001。

73) ジジエク、p. 94。

1 節で参照したパワーの書に記されていた歴史的事実がある。1939年9月、ナチスはポーランド侵攻、1942年、ヒトラーは、ドイツの地で暗殺されたアルメニア人のジェノサイド首謀者、タラートの遺灰をトルコに返還、トルコ政府はイスタンブールの霊廟に「英雄タラート」の遺品として安置する。そのヒトラーは、ポーランド侵攻の一週間前に、アルメニア人のジェノサイドについて触れている。

ジンギスカンが何千人もの婦女子を殺したということは誰にも知られていることだ。そして、歴史は、彼を、国家の創建者とだけ見なす……戦争の目的は、定まった戦線に行きつくことではないのだ。敵を肉体的に消滅させることだ。この手段によって、我々は、我々が必要とする大事な生活空間を得ることができる。アルメニア人の虐殺など、今、誰が覚えているというのだ⁷⁴⁾。

2010年4月、その推定150万人が殺害されたといわれるアルメニア人虐殺から95年目となる追悼日に出されたオバマ大統領のコメントが批判を引き起こすとの報道があった⁷⁵⁾。20世紀の「最悪の残虐行為の一つ」で歴史における「破壊的な出来事」とコメントした時、オバマ大統領が「ジェノサイド」という言葉の使用を意図的に回避したのが明らかだったからである。2008年1月の時点では、オバマ大統領は、これを「ジェノサイド」と呼び、この語を何度も使ったのにも関わらず、今回は、トルコとの関係を視野において、「ジェノサイド」という言葉を避けるという政治的な配慮をしたと考えられている。超大国アメリカ大統領の立場でトルコの国民感情に配慮する、いわゆる「政治的配慮」ということになる。ヒトラーの発言に比較すれば問題などないのに等しいと思う者もいるかもしれない。しかし、「我々」と名乗る側、すなわち自国、の犯したジェノサイドに対しては、私たちは認めることがいかに大変なのかという事実をあらためて思う時、そして、歴史上、多くの良心的であると自認していたはずの国々にジェノサイドへの介入を止めさせ、無視と言ってもよいような行為を許し得たのは、こうした「政治的配慮」であったという歴史的事実を思い出す時、言葉が作り出され、法律が設定されても、ジェノサイドの防止に成功する世界となるには、大きな障害がいくつもあることは明白である。その中で、私たちはどこまで教育に期待できるのだろうかという暗澹たる気持ちにもおそわれる。それでも、「誰が覚えている

74) Power, p. 23.

75) “Obama reignites Armenia stir” *The Daily Yomiuri*, April 26, 2010. (“Commemorating Armenian Remembrance Day on Saturday, Obama called the deaths of 1.5 million Armenians during World War I ‘one of the worst atrocities’ of the 20th century and ‘a devastating chapter’ in history. But he did not call it genocide.” “The statement was less than the full and frank acknowledgement he promised Jan. 19, 2008, when he vowed that as president, ‘I will recognize the Armenian Genocide,’ and repeatedly used the word. ‘I also share with Armenian Americans—so many of whom are descended from genocide survivors—a principled commitment to commemorating and ending genocide. That starts with acknowledging the tragic instances of genocide in world history. As a U.S. senator, I have stood with the Armenian American community in calling for Turkey’s acknowledgment of the Armenian Genocide.”) 結局、「政治的配慮」は注7) に記したパワーの任命の承認後のオバマ大統領の言葉に率直に述べられてはいるのである。議会の承認後、パワーを推したオバマ大統領の言葉：“As a long-time champion of human rights and dignity, she will be a fierce advocate for universal rights, fundamental freedoms and U.S. national interests,” Obama said in a written statement after the vote. (“Senate OK’s Obama’s nominee for U. N. envoy,” *The Daily Yomiuri*, 2013 August 4.) 「米国の国益」は、「普遍的な権利と自由」と必ず並行して確保されるべきなのだ。その点では、同時期、オバマの外交政策のプレーンであったパワーも同じスタンスであると考えられる。さらには、彼女のそうした限界は、注7) の著書のトピックの恣意的選択や彼女の取る政治的スタンスに批判があることにも見られるといえよう。

るというのだ」と誰かにどこかで再び言わせないために今出来ることはあるはずである。何よりも、正しく知ることの根底にあるべき、ジェノサイドの特異性、ジェノサイド後の困難さ、特に、記憶、報復と赦し、責任の所在、について、考察をさらに進め、学習者に何をどのように理解させるべきなのかを整理し明確化する責任が、異文化コミュニケーション教育を専門とする者にはあることだけは確かなのである。

[2013. 9. 26 受理]